

第4回放牧サミット、那須で開かれる

9月29、30日の両日、第4回放牧サミットが栃木県那須町のホテルエピナール那須で250名余の参加者のもと、盛大に開催されました（主催：日本草地畜産種子協会、畜産草地研究所）。

今回のテーマは、「水田・里山放牧による新たな土地利用・家畜生産方式の推進のために」ということでした。

現地検討会

第1日目の現地検討会では、バス5台を連ね、福



島県安達郡白沢村の大内武幸さん（繁殖牛16頭）を訪ねました。牛の状態は良く、大内さんはますます牛の放牧飼養に自信を深めているようでした。ひとつ残念なことは去年まで借りていた地続きの土地が契約期限切れと

いうことで放牧できなくなり、草ぼうぼうの状態になっていたことでした。土地利用権の調整の難し



左：放牧1カ月後 右：放牧直後の耕作放棄水田さをうかがわせます。白沢村では、120戸の肉牛飼養農家のうち9戸が水田里山放牧を始めており、



放牧地で生まれた元気な子牛たち

今後さらに普及しようだということでした。

次に那須に移動し、最初に相馬和至さん（繁殖牛16頭）の水田

放牧を見学しました。あいにくの雨の中でしたが、わずかひと月の放牧で耕作放棄水田が見違えるほどきれいになっており、隣の耕作放棄水田と比べてその変化に参加者もびっくりしていました。相馬さんの放牧を見て、自分の所の耕作放棄水田にも牛を放して欲しいという話が出ており、来年はさらに放牧面積が広がるということです。

次に訪れたのは高梨幸一さんのお宅です。高梨さんは会社勤めで、日中時間が無く、家のまわりにはかなりまとまった水田があるので今年から放牧を始めました。放牧を始めるにあたって、ご夫婦とも脱柵のことが一番心配だったので、牧柵は高張力線3段張り、コーナーポストは足場パイプの支え付きという破られにくいタイプを採用しています。今では高梨さんご夫婦もほぼ安心して、楽になって良かったと言っています。

最後に、平山邦一郎さんの山間地の水田放牧を見学しました。平山さんは70才になり、牛（繁殖牛6頭）の世話もたいへんになってきたからそろそろやめようかと考えていたところに普及所や畜草研から放牧の話があり、今年からやってみることにしました。たまたま放牧地で牛が分娩してうまくいき、牛舎から地続きの放牧地なので親子とも自由に牛舎と放牧地を行き来できるようにしています。餌やりや糞出しが非常に楽になり、牛の状態も良くなって、これならやめるところかもっと牛の頭数を増やそうかと考えているそうです。

講演会・シンポジウム

翌30日は朝から講演会とシンポジウムです。東京大学大学院の生源寺眞一先生は、現在の輸入食

料に依存した食生活と日本の農村風景や風土とのギャップが問題であり、放牧はこのギャップを少しでも埋める



盛り上がったパネルディスカッションができる方法ではないかと指摘しました。

長いことと牛の放牧研究をされてきた高知の上田孝道さんは、日本の歴史の中でかつては土地利

用方式として広く放牧が行われてきたこと、現在荒廃しつつある野山に牛を放牧することで美しい景観と、土地に結びついた食料生産が回復できるのではないかと、そのための「放牧の作法」が必要であると述べました。

畜産草地研究所の小山さんはこれまで開発された小規模移動放牧のための技術を紹介し、さらに周年放牧や親子放牧の技術化が必要であるとしました。

さらに、島根県三瓶山で草原を利用した和牛の

繁殖肥育一貫経営を行っている川村千里さん、福島県の桑園跡放牧、那須の水田・里山放牧、大分県の「おおいた型放牧」の事例紹介がなされました。

パネルディスカッションでは、土地の利用権の集積がやはり問題であること、山林の利用はまだ制度的に困難が多いこと、山地傾斜地の放牧利用はまだまだ解決すべき技術的課題が多いこと等が明らかにされました。

（飼料資源研究官 落合一彦）